

第十三講 聖書外典と女性聖人テクラ

主旨：古代末期における古代的規範の崩壊→男性からの女性の自立

女性自身が自らの語りと聖人・聖地を持つ

女性の世界の広いネットワークの存在：エゲリアの例

物語パターンの規則性

- (1) 男性原理（結婚・性交）の拒否→男性（母親）の怒りを招く
- (2) 女性の自立と奇跡（雌ライオンがテクラを守り、雷と人食いアザラシの死）

研究史

- (1) ヘレニズム・ロマンスに属する
- (2) 民間伝承が起源。ヘレニズム・ロマンスも外典とともに民間伝承に話の種を得ている。その背景にこのような民間伝承を支える家族集団が存在しており、女性の語りの場が存在していた。
- (3) キリスト教の台頭は古代社会を変貌させてはいない。変化したのはレトリックと解釈。「聞く者」としての「ヒロイン」の存在。

足立さんの結論

古代社会は変化していた。古代社会の規範である市民原理は弛緩し、女性は男性支配から自立し、自らの世界を形成するに至っていた。

結論に対する批判

- (1) 教会を通じて男性原理、市民的規範の貫徹が図られている。この古代的原理の崩壊と女性原理と非古代的規範の確立を何によって証明するのか。証明されていない。
- (2) 外典の舞台になっている東地中海世界では問題にされている時代においては社会の衰退、都市の衰退は証明されていない。七世紀に入るまで、古代文明を支えていた都市は社会的にも経済的にも繁栄していた。
- (3) そもそもテクラが生きていた時代はパウロと同時代の一世紀であり、古代世界のまさしく絶頂期といってよい。またテクラ信

仰は一世紀以降古代末期まで「継承」されているということになるので、古代末期という時代設定に適合しない。これのどこに古代末期と言っているのか。

- (4) 外典のテーマは男性に対する反抗というよりも、「性」を罪悪視しようとする教会の一部の風潮を反映したもの。去勢した修道士が出てくるのも、女装する修道士が出てくるのも、共通の基盤がある。そしてこのような極端な「性」に対する理解を教会の多数派は危険視したのだ。
- (5) 従って、テクラを含む女性の聖人や巡礼者の物語は女性が語り継いだというよりも男性に手によって書き留められ、女性に対する説教の材料として利用されたに過ぎない。

はじめに

「初めに」の冒頭は非常に論理的な構成になっている (134)

「女性聖人テクラは、古代末期の地中海世界において特異な位置を持っている。」……問題提起

「女性信者の声援を背にして、彼女を迫害する男性の差し向ける野獣と戦い、自らに洗礼を授ける物語は各地に伝えられた。」……問題の中味

「3世紀の初め、北アフリカの教父テルトゥリアヌスはこれを女性に洗礼と説教を授ける権利を与えるものとして断罪したが、」

……正当教会の立場と問題の時代の確定 (3世紀)

「テクラ信仰は止むことなく拡大し、特に小アジア、セレウケイアの彼女の伝えられる墓所は聖地化し、地中海各地から巡礼を集めるに至った。」

……テクラ信仰の広がりとその中心地

続いて足立氏のこれまでの研究を振り返り、「古代末期のセレウケイアにおけるテクラ信仰の拡大と発展には、古代末期同時代における女性たちの積極的な関与が背景にあった」と、女性が積極的に自分たちの聖人テクラを信仰する運動を主体的に支えていたことを主張する。

古代におけるテクラ伝説の意義：

「女性たちがテクラの聖地に家族からの逃げ場を求めたり、相互教育を行っていた」（134）

史料：『パウロとテクラ之行伝』（聖書外典：2世紀）（135）

ジェンダーの視点から（135）＝最近の歴史研究の潮流の一つ

1. テクラ『行伝』と聖書外典のヒロインたち

『行伝』の物語の概要：

第一部：小アジアのイコニオンの裕福な生まれ（135）

許婚の存在：タミュリス

使徒パウロの出現→パウロの許に居続けになる

母親の怒り→テクラを火あぶりに→雨が降り助かる（136）

類例の指摘：聖人に会おうことで、性交を拒否、夫の怒りと奇跡
アグリッピナ、ニカリア、エウフェミア、ドリス（『ペテロ行伝』）

アンドロニコス、ドゥルシアナ（『ヨハネ行伝』）

マクシミラ（『アンデレ行伝』）

少女、ミュグドニア（『トマス行伝』）

第二部：苦難と奇跡：同性の女性の支援

アンティオキアで野獣の刑→女性たちの抗議→雌ライオン

→人食いアザラシ→処刑中止（137～138）

パウロとの再会と各地を回り、セレウケイアで没する（138）

従来『行伝』の扱い＝パウロとの関連で扱われ、第二部は軽視（138）

各地のレリーフはテクラに迫る雄雌のライオンが描かれる＝パウロとの絡みよりはテクラが物語の中心

2. ヘレニズムのロマンス化、民間伝承か

（1）ヘレニズム・ロマンスとの類似性

エルウィン・ロード、エルンスト・ドプシュ

外典はヘレニズムのロマンスに属し、キリスト教側が巧みにプロパガンダのためにその物語の枠を利用 (138)

カリトンの『カイレアスとカッリロエ』 (139)

ほかに『エフェソス物語』、『ダフニスとクロエ』、『レウキッペとクレイトフォン』、『エティオピア物語』など (139)

「いずれも、裕福で美しく、行いも正しいカップルの物語で、愛し合っているのに多くの困難から離れ離れになり、奴隷に売られるなどするが、最後に再び結ばれて故郷に戻るという話」 (139)

「恋愛」を「信仰」に置き換えている (139)

ローザ=ゼーダーの説：「ヘレニズムのロマンスも、聖書外典も、ともに共通する民間伝承にヒントを得て創作」 (140)

3. フェミニズムと民間伝承

1980年代のフェミニズム

スティーブン=デーヴィス：「教会に保護を求めていた寡婦たちの中でこれらの物語が生み出された」 (140)

デニス=マクドナルド：「女性の語りの場の存在と持続」 (141)

「外典のラディカリズムを抑制し、ローマ帝国の支配秩序に擦り寄って、女性を夫や家庭に服従させ、出産と育児を女の仕事として再認識させるために書かれたのが『牧会書簡』」 (141)

バラス：「男性と女性の文化がはっきりと分かれている所では、男性が女性を排除した物語を作るのと同様、女性だけの間で語られる物語も形成される」 (142)

4. ケイト=クーパーの挑戦：ポスト構造主義的解釈の試み

90年代の見直し (143)

デイヴィースやマクドナルドの研究は時代遅れ (144)

「古代に私的領域と公的領域などという近代の概念はなく、私的領域とは別の形での公的領域であった」 (144)

近代の画像の過去への投影というアナクロニズム (144)

「結婚のモラルへ傾斜する心性は、キリスト教徒の発明でなくて、既に帝政ローマの最初の2世紀に出現していた」(144)

「キリスト教の台頭で変化したのは社会構造でなく、レトリックと解釈の問題においてである」(144)

「ヘレニズム・ロマンスも、実は男性市民の義務を中心素材として描かれている……。外典もこの文脈で読むべきであり、このローマの市民的義務の思想に対決を挑んで、自らの優位性を主張せんとする教会の意図が感じられる」(145)

『カイレアスとカッリロエ』＝貞潔な結婚とそれに伴う出産と子孫の安泰
外典ヒロイン＝市民倫理を体現するカップルに使徒が割り込んでくる

(145)

ヒロインの役割＝「聞く者」としての役割、使徒の優位性を認めるもの」

(145)

ヘレニズムの影響重視説；「民間伝承や口承に頼らず、当時の上流市民の文学的傾向を文字から読んで知っており、それに意図的な攻撃をかけられる人々すなわち教会男性指導層を作者として想定する。それは帝政後期において、参事会身分にかわって都市行政責任者として乗り出そうとする、教会の姿勢を暗示」(146)

外典の「読み手」或いは「聞き手」としての女性(146)

「既婚女性が結婚していた殉教女性の伝記を模範として薦められていく」

(146)

教会指導者の狙い：「過度に影響を及ぼさない……。従順というスタイルで夫を神に導くことで自らのアイデンティティを高めるよう俗人女性を勇気付けている」

(147)

5. クーパー批判と展望

著者の基本的立場は次の言葉に集約される：「クーパーの精巧なレトリックに幻惑されているだけではない」(147)

クーパー説への疑問点(1)：「外典女性は本当に「聞き手」に留まっていたのか」(147)

外典『行伝』は教会制度化を目指す男性には不都合な要素を含んでいた」
(148)

クーパー説への疑問点（2）：書き手が男性であったとしても、その元になつた話は男性とは限らない（148～149）

著者の結論：「したがって、口承伝承と女性のパフォーマンスにテクラ信仰の起源を求める学説は否定できない」（149）

スティーブン＝デイヴィースの新著：考古学調査→テクラ信仰の持続と女性の主体的な関与を再確認（149）

おわりに

『テクラ行伝』の起源：結論は保留（149）

「女性の『巡礼記』や『奇跡筆』、それに地中海各地に残る遺物などからは、使徒パウロの伝承と遭遇することで生み出された外典『行伝』は、深く広がるテクラ信仰のごく一部にしか過ぎない・・・女性が作り上げた伝承の系譜が隠されているかもしれない」（150）